俳諧一紫集

五

1 4
3157
30(5)

54
3157
30
(5)

俳諧一葉集附合之部四

古學庵佛兮　編
幻窓湖中
坎窩久藏　校

元禄五壬申

菜ちるや鉢に養する椒の先　翁

はえて去真昼の酒しこの　支考

草父入八日薮入とえさうけて　、

ねつくさみおろく第一括して　翁

むつ鶉肉掬しつゝそめる　、

風も吹ぬ手瓶の生に寄　考

ウ

雪の舎すゝうつ村紅葉き　秀
基ふれ　写すも乱さふらひ　翁

くさ〳〵と言する物を蒔やる
見うよ紙ハ　彩　朱　墨　〃

二三番三のハ筆は千てとく　秀
数をとやし〳〵と尺ちうく色　〃
中蔵うそ行ハ雑つける雲の月　翁
楪ハるきぬハ角力丸の筆　〃
今年の田〳〵くやう乃の手巻て　秀
夜明の星の　のまさひけり　〃
沙鉢千岩陳今も箱うる石　翁
白い沙〳〵と紅の器入　〃

二

傍の傘ハ側うもうけう
多弧を持て人の名を　同　〃
中猪うの紙ハ初の〳〵ハ　翁
筆をとり〳〵　さ紙をつ〳〵　〃
松風のすん〳〵と以　秀
持ふう傍ふと岩ト門　翁
傍ハ多の　ふ米るま水鉢　秀
る一匹千箱ふ箱ふ行ふ　〃
小湖市の時うふ乃ふる年人　翁
海う多けきハ女角ふ角　〃
むゝ〳〵浮〳〵以月の入うう　秀
傍の板う　板　杉の　〃

二の丸の実りうるやく屋敷印　菊

白もあるうてゆくの新は　〃

さしくと茶碗の食を喰ひ給　考

口上　いつてうくます　堂　〃

民部の家と笑ひ　菊

手形を越てのひら書物　〃

手もやの小能のいつむ二段　湖風

物とすさるる岸のかり株　菊

見知らるひきうまれもえいく　沾蓮

刀の柄うてう　牧　利牛

食物の後を洗うて新の角

度ゝ高し越すの金の友うら　菊

小樽うるる本樽の丸如し　桃隣

孫一文うて六銭をうる花　牛

蒟蒻の色の定まる秋ばし　蕉

参りの寺うて長の義　検　蕉

尺うの子の子供うて手いるの法　菊

すくすまふうて飯を　洛

ちさうても物湯を呑く茶屋　牛

義を焼く酒う喰を気　隣

月影の向ふ仏の基ゆうし　菊

ぬる人帰りる苦の紙書　蕉

雪掛の峠なのうく花の雲　民
ふるさと野辺の草もはるみ　風

あめのもち　枕くさ　横やまの餅
菊もち　なし　蜂もの　次　嵐雪
蜂屋きの大磯　ほとゝぎす　其角
山の坊ふる　の　陸奥の　菊
ふこの手　有毛の　弱の　雪
風ひや　ひの手　きれ　角
俳諸　まつ　撲　ものあるさし　菊
年　ところ　金の　しあ　雪

角　菊
雪　角
菊　雪
角　菊
雪　角
菊　雪
角　菊
雪　菊

船を漕よ　しとやかに漕て　角
堀切　行かゆる　所の入口　壺
女房ふる米屋の寿ことやかましく　菊
雪田の喧嘩　やかましく　角
夜寒く　一年の　孫六拔さ　壺
多し　多れ　紙の　石菖　菊
牛の子　仕牛　せつさく　市の中　角
に　紙　秀の　田舎　陸尺　壺
とかまと　夜に入　角の　胸　菊
ろことくと　時の　ゆくくん　壺
鯨　ちる四　五　新蕎の　素表　角
すんすとのひる　家　兄　安　菊

一ゝゝいハ江戸を　尺ゝゝの　小高ひ　壺
みゝゝゝ　汲て　市の　門　赤　菊
紫ゝと　未来を　梅　老の　角
三人　咲ふ　表　めなゝし　壺

芝蘭舎

涼菓

世除のよてゝ　紙帳　やけ　菊
旅の　音　雞　ようの　茶の　壺　青山
砂川　ひゝゝ　又釜の　かゝふ　おさ　蓑臣
門ちりひする　醫者の　蒸　おさ　渭子
月の　取　元ゝゝ　ぬ　火　嘉　嵐蘭
志ろ　お　西　ゝ　ハ　ゝ　ゝ　き

ウ 産業蛭のまを米とする金の才　紙水
めるみひとりとらむ陸尺　妙水
うのめる人もこてしむ契うて　嵐雪
てゐもいるう仮名を去　紫
り物を頂て新をかくし合　翁
木賃泊りハ不残をまする　怒誰
入うけも弱き言此の舟の自　良
塩くゝ荷て売ゝ家ゝ人　山
らゐるゝ陳ゝ白を挽むしぬ　妙
小船の文を送る村し　子
叶花手紙ハ西やとめけむ　葉
寺のられ木をあのまを水　紙

エ

ニ 入物も四隅を似きて牛　筇
かゝうをきけハ色合を米　雪
ぎうゝぬ業人色の変変　山
ゆさ手ゝられて注在若し　雪
火桶すゝ和ぬ花の雪清弱　子
蕎麦の粉ふゝ翌の振舞　葉
返りをぬ手弱ハ掃て拭めん　雪
おゝけさ点ハ色のおゝよゝ　紫
芙蓉風ていい付ういせのお沙　紙
先生和ゝ秋のゝゝれ　良
柿尺丈の寄麦ゝ尺四ゝ居の月　翁
徧ゝつれて小舟のゝこむ　山

ホ

[illegible]の尾[illegible]の[illegible]の[illegible]
雄滝の岩[illegible]　[illegible]
[illegible]中を[illegible]て　[illegible]
きけん[illegible]酒[illegible]　然
やよやよ[illegible]の[illegible]　子
第を[illegible]人千[illegible]　良

[illegible]　史邦
おのれ[illegible]と姫[illegible]　止　沾圃
[illegible]　翁
[illegible]ゆ[illegible]板の[illegible]　[illegible]

[illegible]　沾
栗[illegible]川上の　山　秋
[illegible]の[illegible]石[illegible]　一
[illegible]麦[illegible]　翁
[illegible]の[illegible]　秋
祖父の[illegible]　沾
[illegible]　秋
結[illegible]　可
[illegible]　沾
[illegible]　秋
[illegible]の[illegible]　一
[illegible]の[illegible]　翁
[illegible]の[illegible]
[illegible]

すんすると苗代色くもむ彩の色　沾
光るうのすきぬ伊勢の宮ぬ　一
きるを吹きかるうるかなる　秋
質をふうるる百姓の家　菊
ぬるかく痩るる鳥を化粧し　一
蓬しうるうしの白骨塚の秋　沾
縁を減新ちまきてはるる稼の春　菊
弁当浮とくるもの居所　一
うむるのは休憩十宵を去て　沾
名古屋こしゆく遠載の男子　菊
悔しるるみちは松の百しを　一
役をめぐる青の月蝕　沾

おきとねの上さく風の走みて　秋
おるるしはるるもひとるる光　一
動めるるを去て沈家の迫るる　里圃
文を小姓るるるるの明　乙州
面陣はめるるる去れるいも　沾
徴てるるはし家ゆるるる今　里
埃和ゑ悔かるるるるるるるる　州
素良はやつるる八幡橋外　沾

酔るはるるに寸さすし　鉢の春　史邦
菊一杯をるる稲のるるる　貸　菊

蓼の穂と醤油の饌をかなをかく　盛水
歌市と人のとうる夕　肖　秋
木刀のきはめしとうる居合茶　菊
二ぢうこの蓼の葉を板　水
京さとと筆の二ぢを吹き　秋
石丁あれハ学問ちの種　菊
手習ニう野筆古をかんあ唐　水
味をくとともやけぬふ松魚　秋
胸言ふ味の約蓼春ぢ山く　菊
秋入ぬの筋奉いるうう　水
墨流と時つ　おとうる青の肖　秋
学住千ふうしちのいさうひ　菊

指ちの剣刺刀を強くきう
ふくく茶のとうとまつる物　秋
花と舟ん一尋まをかすし紛　菊
小姓のはれ寺を二月　水
竹橋の内とう氣ひ嵐穴　秋
ちの巷このく役ちいとう　菊
夕芳とと洗濯債を投也て　水
といめとうとう組母の帝い　秋
橋ちとまれハ打ちひとう鎌　菊
代ひとうさ聖ハ白ん　水
教逝ひの文てふ床とる切ふも　秋
百里を中し船のきめし　菊

挑こうし去休材木の行ゐひ　水
よろこそそれぬ中い生　鶯　秋
いふ生と詩を重ねる身す　菊
夢ゐをやちて明のゆりを　れ
摂　秋を枯ていろ仕ふこうし　秋
除る寒る加ふ　の　る　茶
加南　雪降　雪ゆりさこう　水
二秋　二日北　秋ゐゆうつき　秋
ちて芳野やあくのむさう　水
百姓　やまむ世苗代のひ　菊

草庵懐故人

月や海に雨のくれを待　潛子
家ち秋のしぬ出ゐる　菊
秋を秋と愛ふさ山の色　千川
まふ雨ふれの海のこうこ　涼葉
端しぬ鼻武蔵ふこうこ　此筋
めれい坂のこうこ　流　子
猟人の矢先ひけとを振て　菊
まむ出ふ重のちふ　川
入口北海ふこのれこのむし　筋
きこの山鶯の殺板をとく　子
舟こうこ鮫くいてみまこみ　紫
狩ふ笑こふまひ怪ふ　川

伏見やもしけるもえ袋の底抜て　菊
免しのこゝろを咲もあらし　秋節
月影は雲あるとて黒ふ烏帽子数
屋の夢の古い寺　川
花咲は木賃のなり引すて　菊
おろそかもさぬ素の菊風　節

砂茸やゆきとゞまらぬ秋の雨　菊
まきすゝきて河ぶ苦川　盛水
昭ふよう居村の多地さゆて　史邦
さしこむ月ふ居瓶の蓋　半蔵

埼玉の宇　桃　風葉
探さこゝさ華のゆくさ　菊
ゆくよりまは出村ゆくゆ蓋　水
紙袋の蓋ふ浦ふ宵　秋
弁当の菜を出をく石の上　義
やさしきを咲るまゝこ　葉
よい村の蓋ふ見を丸く行て　菊
物をうちつゝ見る　水
月蓋を面の陣止星ゆう　秋
ふ編の傳を浦免く蓋大豆　葉
絹出年ふさ起さて秋の風　水
春を茶ふるをゆすゝ小坊主　秋

花守のやかと見しうる去年のふい　蒼
二
ほそゝ芥溪をのほるわか鮎　翁
春風にたち鼓ゆゆる旅芝居　葉
春日なりけり伊册の誥白　水
孫孫と野郎衆のおもて鉛　翁
是非は誂へはけん物役　鈴
見しりもて色付かりし本意の下主　蒼
嫁入するよりもや野郎子引　翁
袖ぬらす淺悴子の会さて　葉
月もさひしき醤油の粕　水
茶栽き百石ばかり門すたひ　蒼
ゐるすさやけき奈良の坊方　翁

かゝりさて段屋けもはくやす僧雨　鈴
見るめも嬉しき生のなまなれは　葉
出店へと又は隠居の新しられて　蒼
干物漬やさ精進の鈴　水
手拭のかきれてこれをたはかり　翁
話辞をかゝむめ板茶の上　葉
人つゝく毛利細川の花さかり　鈴
春もけんかりきしの勢ひ　蒼
まくてもうくへ物をとらうふし　翁
提ておもすへ秋の新蕎麦　洒堂

芳の月梶のうてかさよをて　嵐葉
はるかしらのえすを　伝水
松山の緑ハはるしーの吹こうう　雪
焙炉の煙をこの中川舟　菊
筏山なの海をくうる小屋術　水
ふうう月はうんしはふ風を　葉
掛乞うえの中をおきそ　菊
繋ぐ庵ゑ尺をうこかが養の袖　雪
宇嬢す山雀宮義の中ーう　葉
正章愛のむ風の。桂さよ　水
間のうに先ようあをやう　雪
きゆうえうう弾おさそれ　菊

俗すふ義花の雪の物月秋　水
秋智のお山のまおをを雪　葉
うはめすうう立ふ長ふも　菊
義うう年吉の海へ飛も　雪
二町中の与ハ赤くきんうし　葉
次ゑ三うすは分部う　水
華元袋ゑ地を陽宇秋の雪　雪
伏見はうの音を風の月　菊
玉手の弓箭ときけハ恨しや　水
秀話うゑ弦歩本ふ　葉
山伏を切てうけう軍の雪　菊
弾打ハ弓ぬよの中　雪

つゝ合ハこれ上戸ゝ欲ゆゝ
きゝ至ゝと雲ゝあゝ乱ゝ
の物て和当ハ乱手ゆゝ
之こ先しゆゝ笹の大日
樋杯さ夫四ゝ雲ゝ人の
むゝ石ゝ前ゝ鯨ゝけゆく
不ゝ石ゝ池館船の扇の木綿市
杉葉をゝゝゝこゝ乱ゝ出窓
朱五作人ゝゝれゝゝ出ゝん
きゝのゝゝゝゝきゝ雲ゝ

菊　水
菊　雲
菊　水
菊　雲
菊　水

苅株や夕四の上ハ秋の雲　西堂
雲ゝゝゝゝ代雲ゝ　嵐竹
ゝ樋杯ゝゝ雲ゝゝ　菊
雲ゝゝゝゝゝ雲ゝ　小艱
古戦場ゝゝゝ部ゝゝゝ　嵐葉
ゝゝゝ尺ゝゝ　雲
ゝゝゝの門の樋ゝゝゝ　竹
雲ゝゝ四ゝハ雲ゝ　入　虹　菊
ゝ樋ゝ肩休ゝゝゝ　鯨
水仙ゝゝゝ州の傳ゝ　葉
鮮清ゝの雲ゝゝ　昌房
雲ゝゝ鯨の桶清　西秀

小竹ゝれ門後かゝむ初冬　阿高
餘も事れと自待の意　拙志
拙子ゝほう添のらさふき　湖力
ゝしいゝかゝく三方の蠶斗　野徑
花のゝ射来ゝ漏防くゝん　去来
蠶ゝゝ月の　吉　面

十月廿五許亭無り　翁

ゝゝゝゝゝゝゝゝれ初冬
野ゝ仕　ゝゝゝ麦のゝ　古　許六
田宮を宮ん小松の時雨て　洒堂
汁のみゝゝ月の風ゝれ　岱水

宮の月おゝく入ゝと古　蘭景
先工夫する蚊帳の弱ゝ　執筆
才計の傍寄ゝ蚊ゝれて　水
焼こゝゝゝ小ゝゝゝ潜　翁
粽つむ笹のゝゝゝゝゝゝ
猿礫をのゝゝ赤ゝの入口　六
水分ハ蹴ゝ人ゝゝゝて　壺
和初ひのけて蝿の時飽　葉
青雲をゝゝゝ形の雲ゝ　水
小ゝ蘇のゝゝゝゝゝゝ　翁
八月ハ旅ゝゝゝ小蚊弱　六
焼山ゝゝの雲ゝの赤ゝけ　壺
葉

歩数すくなけれども花の木うゑ
作りとも長寿なる物の卵なる　水菊
まこゝろ作者の富夫人やう　六
曲麻呂を酒に酔すると　豊
さけのくと能一本手書て　業
歌名ゝ王長物の上　水
物火の影めつらしき甲侍　菊
山わとゝきしに出をむる者　六
咲きそ手魚の走ゆゝれて　豊
尾貝にかゝふみすの女方　業
いり中ゝ氏を走りすす雲　水
野を　うゝて出るのゝ　菊

弓の弓異河豚の小方丈　六
一舌のゝゝ狐ら　豊
一すちゝまゝ葉の面木芝原　業
藻ゝこいる家根波の坂　水
宗長のゝ記すなたの作　菊
業ゝすゝ多む百姓の家　六
もの長まゝて廻る神木米　豊
七十の賀のゝゝ　業

作六亭無作
二月作ゝ宗祇ゝ宗長ゝ宗鑑ゝ宗一斗
宋玉外六戸八寿ゝの作合ゝ

洗足で家と共のつく家うれ　洒堂
絡飯ちらふをもとの里　許六
うすきを面白すの絡をつくらせて　菊葉
きハをやすハ七くさもうり　嵐葉
月のひろ狩もかるさか餅　六
葉地を家で興ハ家の雪窟　雪
おゐちほうんのもれさううし　葉
桃の葉とるる後で作の子　菊
面白の家豊はをを仲桃　雪
むう嘲で物で命する　六
きぬくハ雪の踊の心をを　菊
東大の月をすくき体　葉

寺詩の核で中とす家の寺　六
二人の相撲仕先で仕く　雪
家うけの提灯志めす新蔵　葉
汲きしるる星川の橋　菊
村をも田面のうれまを立　六
塚のうくいのもの石原　雪
[illegible]佐の沙子ひ[illegible]の末　菊
ら生駒れし今川の家　葉
うつ物提樽の風をよう無　六
又きるうう四玉田のき　雪
新家ゑめをうう蕎の志　葉
ようれし絹で[illegible]麦の粉　菊

百士をかりあつめ
自在手段をつくしみもし
火ともしつる石ゆてうふ仕
先積のくるる事の物　朱
うつすうと門の瓦手を洗て　六
方寸の手かゝり時を見る　歩
そゝをゝ学問の用を美歩之　業
まりの捨手法をかくゝ　翁
より垣手木をゆゆる塀の内　歩
なハ赤うもる二月翁な　六
邪花手伊勢の蛇の糸を見て　翁
柏樽まらやくゝ宝川の上　業

支梁亭は切
口きゝに塀の庭をふかき　翁
第尺ゝよゝ義のゝ義　支梁
山雀の笠を隠ゝ笠ゝ　嵐業
秋の邪方の水のさゝ　利合
旅人の喇ゝ月のゆゝ　洒堂
大戸をゆけゝもる課　盛水
鈴の玉ゝの義を青拾　桐窓
河ゝゝ橋を踏初ゝ　也竹
みゝゝ手ゝ田の板ゝ植て　源
うけ業を矢くゝ歩豆の汁　翁

こすりの雨もまだ降り蛙の羽合
濯ふくろ や 出坊 の 柳 巷
さらさらと 陸 蔵 しる石の上 水
洗て 元 合 の 玉 や 山 玉 月 葉
行雲の 長 門 あ を 秋 立 く 巷
雾 て 朽 け む 一 緒 の 清 梁
雨 ら 入 花 を 流 の 百 巷 床 竹
苣 の 二 葉 の 山 て 行 の ぬ く 宴
杉 を 八 七 寺 の 山 郷 ま 巡 く れ て 合
咲 て 寺 さ し 軒 か 巷 の 巷
咲 初 て 寺 の ふ 白 ま ま と 様 に ま 翁
ま の 流 の 柱 柱 の ら す い ま 葉

九 昇 し く 頭 ま し ま ま 旅 の 船 実
き ま け て 法 巷 を ま し る 社 葉 町 竹
な さ ま に 鶏 を ま し る 巷 を 百 ん 巷
み ま し の 方 は れ ま く ふ 門 に 梁
ま は ま の 鶏 の 雫 て 肩 寺 し 合
ま ん 黄 ま ま ま る 門 前 の 坂 葉
は ま ま の 物 黄 ま し 咲 ふ 香 の 月 翁
上 毛 吹 ま ま 寺 ま ま ま の 響 実
谷 侍 ひ ま し ま け ま 休 筏 竹
方 刀 物 は ま ま 二 て ま ま ま 巷
物 ま ま ま ま れ 鄭 ま お ま 一 巷 葉
多 て か ま く ま 九 巷 の 葉 梁

花さそふ御室の河の人通り　宴
まとゝ業しるの神も孫し　執筆

木ゝにうめる宮屋入江の
毛をひく鵜飼の中流の板　荊口
掛乞の中流の板　洒堂
乗しハ木腹たくゝち　翁
梨の枝おもをハ月の月　此筋
梅ういろふ芋加の花け　左柵
秋風　祭　柳　柳のやと　犬舟
蔦の　梁　の　弓　千川
翁

六月のなを四位侍の木　畫
を蔦の入し前池ゆるまる　板
祭鍋とうゝ蔦し供まる浮去宗　筋
葉面の流れくるゝ山　陣
蔦をの弱なおゝす簾の蔦　川
俳を豆の紫をとこく秋　舟
月代をふゝき里のを乱陳　畫
を縄ひうし言の形くゝ　川
蔦をゝ乱ゝれぬをさう　前
蔦の上を此ゝ功光　板
翁

あるまゝに酒ハ徳をおそるゝて　凡峰
白浪さらすて芦　鶴　し　菊
中汲の碎を初めのを捧さけて　酒堂
内の徒手に皆拾ふ　峰
鳴次ハ板の宴こゝろさしと　菊
板の隙ゝに魚をぬる　圭
ずれ戸を初は来たるの鶴　里東
果ハ入れ　菊
汲めして古意　峰
沛余代ゝ　峰
門ゝ手ゆるのかさ紙砂糖　東
むしろもむれとつす陰鶴　圭
峰

山ゝけを中れ手かしら生の扇　菊
梨地蒔けむ吹のさけ　鶴　圭
名月を弁の格れ下ゝさけ　東
ゝ　の米を背ふゝ　菊
花手寄し糸ゝ　圭
寄ハかゝぬ三稲の人船　東
二
酒先の徒手　峰
多ゝ衣手　菊　圭
きへゝ娘ハ格の物ゝ　峰
意のゆゝ乳を尺ゝ格鶴　圭
珠代の雨ゝ志ゝ田ハ稲て　菊
多酒ハ伊吹て意ゝ秋風

夕月の薬餌をおろす衣の吉　時雨
穿ふしたする贄の物入　菊
麦めしの文ふ飯を入れてし　納
陶引する川舟の中小姓　時雨
性子風と浮き中小姓　菊
時雨迄るを麦酒の文　菖蒲
美しき春の白山を仰ぎて尺ら　時雨
人間ちと引くる珠玉　菊
一点を地主棒沢の花さう　角
猛きものさまさまきめく　時雨
学そこのろの写いとひ　菊
果且帳を鼻孔の写　角

十二月廿日即興

歩よりて花入折れ・梅山茶　菊
海こむやの初亥の加　彫堂
月ちこ数詩香を引うく　其角
羽折のよちを陰ふ　黄山
夕月の色ふけ寒　桃隣
出代さて秋そきけ　銀杏
四手ちきあえしゆ植の吉　紫
肩こ美ふ智舟ゝ祝　角
足元手茶ふ帆けの色　杏
茶を煮こ畑ち伯俊の学索　菊

六張の反古にすく枕しを　山陳
けめしに猫の分をひろめ来る　杏
むりしやうつさしめ妙の点　棠
現は度とうをやせうへう　角
夜の雨きのうくさくさむ　菊
三寸の砂うをきしもむ　唇陳
まひうつと嬢をそやう彩の月　角
二葉と蔦とをさうを疲　棠
おろかなる和尚と友を秋の花　杏
言ふて水をゆける家戸樋　山
山うめてうしてうハ静し　菊
砂みうのつうう合歓の二言　角

加けむりに撰百る床のいきれし　山
れのそぬ船うを屋の汐待　杏
寺色やて背洞家の寺うて　陳
蕉子蓼子以くまを焼　棠
尺ぬうのうの人を老をれう　角
すうさ半分かくようるさ　菊
孤しを星を皎て歌の角　棠
てううはしめの春佐不　山
杉菊を近江ハ海山子　角
点宗れを近江ハ海山子　杏
光うる八湯窟ようかうこう　菊
花ゆ点みうし柳を枕　棠

はさしを中てたち柳の色　山
故堂の影のまくらに　三　陳

深川芭蕉庵

月代をいそくやもしの対面　千川
小松のかしら　梅の山　菊
牡鹿鳴の医師のまうして　共筋
月を言ふ海の川　左柳
海くさ旅の板屋と一軒屋と　酒堂
くりすかしこむかとのしの雫　海勢
物さびしき鹿むりの月の雨　紫水
夜深くなるまで南天の花　川

笠とれば小雨なほ降る
かうもり飛ぶ夕暮の大海　菊
言葉なくて年穿鑿とまるまる　嵐雪
居風呂にしてうちの海出し　梅
鶏くさき稲妻みしるすけと能　筋
情を病のひとりぬる　勢
伊豆の海みさきを船入て　水
一枚の法華宗と肩をする　川
　　菊

世をこやの月海々二里の旅　素堂
物ゝ小角豆とおのうらをさる　露沾

爾のみは雪を踏て瓜のかをりて　菊

雪の隙をゆく大根　許六

あさし　蕗の小道の　蝶　菊

月さゆる音うつをを遠て来る　蘭室

手まくら花を子　桃の花書む　洒堂

徐子のをうる雑色のこのし　素堂

青の有よく窮る家に居て　菊

よの中をいとふ雪とかをる色

小賢情けてあるん春の雪　其角

酒中なるに仮の勇まるもの　渓石

物きさする待の沙の茅うて　菊

夕ぐるこころ子あり　蕉船

筆墨をひとく徐く市の中　盤子

いりも自由に出河の行水　史邦

竹檜の禁こに美人の色　去来

絢すうしるる綿の紅　丈草

元禄六癸酉

世を子河縁の非を志る美業に　涼葉

まこと黄ものは嘆きいと　千川

門雪の窮鳥子かも身を尺て　菊

うさおもふ御る我の杪　宗波
秋風にむしろをしく素き姉　此筋
出もあ秋ハ固さぬへうらなつ　濁子
れ安く露の方をこりすなし　川
手なすて墓殺付し梅めり　葉
尼ちの衣尼ハひとり髪剃て　子
奈良ハむくしの中にすてゆ紀　菊
掛ろさす小袖の繖をともし夜し　筋
金の蒸扇を望の手くさみ　川
見る度に源氏一部の志のはしく　葉
粧てうむ無をやすむ像正　波
出来合く伊勢の料理を庵おとし　菊

たらしてゆくく池庭の妙　筋
鉛有て花の系純せりき立　川
なうけの花れ雫法衣ともよ　葉
石鼻をむかれの杖くみまらうさく　筋
地あの杭にみ岡る名苗字　菊
亥まし八とうう姓庸の末を売む　葉
寺のひうえ八四五夜の秋　川
夕月に植木淀りもより場の彼　左柳
見よゑ飛を取りまし折　葉
先く家れ云儀敷の一繩手　菊
見えしみつうちつ暁子の手る　筋
もつねむし系まよ箴の葉うれ　川

[illegible]の[illegible]の題目　秋　紫
三番の橋より西ハ対面　[illegible]　菊
茶屋の二階ハ海の樣一望　菊
美しき形を丈より手をかけて　菊
うゝみの文を化る弊の手　川
岩頭ハ又来しの浦の塚の上　菊
雪[illegible]を[illegible]　紫
もろ[illegible]を[illegible]　松
只ゝ[illegible]を風ゝ吹　牧笛

かゝうさゝ行[illegible]ける松風　菊

[illegible]の築さし　蜀子
[illegible]　孫葉
[illegible]　野地
[illegible]　利牛
[illegible]　宗波
[illegible]　曾良
[illegible]　菊
[illegible]　子
[illegible]　牛
[illegible]　波
[illegible]　波
[illegible]　紫

はるかなる和かの浦の初霜　良
秋ふかみ外てはうつし菅椒　菊
清潔ふかきの駒ならやる　波
吉和うつ雪也れハ花咲て　牛
孤の樹をたちふ麻もね　子
まの花十さ雪れ計しく手　坡
汐干ちかくをしむ樹をは　菊
磯辺の一人ハ海を見ぬ　牛
先を拾ふ為れとうけき　葉
むかしき苗字長を尋て　菊
九はすうる能の焼物　坡
秋をを母ふ人を極めう　牛

木綿ふ雪を立ふ雪安の里　菊
見渡ふ紅葉の海を一せつ　子
麻ふ雪ふ雪の初ふ　良
金仏ちひまを紅ハ珠ふ　牛
四五十なる所ふ　坡
義かけ雪を伸ふ雪柱　盛永
菊ふ雪を四ハ海ふ　葉
男ふ迷ハ仕ふを屋の辻　坡
霜入ふやし事のふ　牛
切株ふ木ハ花のうやふ　子
海岸ふ岩の菊　良

五人扶持をとりて極うの乳　野坡
日和しるき春の吉　菊
務曳の身をちらに出こして　坡
そうをうけう結ぶの初い　坡
咳しるうてもゆけぬ小の皇　坡
流利ふて酢をのひけり　菊
九三手船うかくるひをして　坡
境のうちれて坊きぬ　坡
去白く松と極とうの囊　坡
うき春のうち張て結きく　菊
癒徳て梨を一向指仕春　菊

裁入をとくうれて法　坡
殺法を殺うする秋文を　菊
ちゆ歩かるるの月の方　菊
ロしてうちの海をくらう　菊
ちうの仏の紛のうもし火　坡
吹もて十年の芳蕊あるふ　坡
ちゆ菜をしけと指をの雪　菊
さうしとうぬるをの風　坡
検のうしうちくし　坡
行義ようきとる仏を祭べ　菊
幾味宮の灰ゆうい　菊
一指ちうの集べしとう分状　菊

ふと小雨とかからつうとうと降
かたくらうを紫ひとかさ取出
むのしの紫鞘をハ若さやむ
市原子そこうろ明くきかしし
神あむすろ花ろ雪しに
月うけこ小岸伊写のさをひき
紫雲折ろ
そうしと相の紫雲ろ多浦
を付てある釜の鎖古を
術とうもおこされて数振の
猫可きうるくをしし
何の出お義如工夫ろ作ろ

坡
い
翁
い
坡
い
坡
翁
坡
翁

掃用の文字いろくの球坡

八丸百ろて雨降柳ろ翁
きの特はきをけろ者
部屋ろ部屋ろ羽形をを
内をろきいく吹ろ振
きのふろこ和ろ月の
物宵ろれて肌ろ
志ふ柿ろ
部ろ話ろ祖父の信
根をこうく振力

治圃
馬道
里圃
治
翁
里
黄
翁

様に成さんとて八重や餅のごと
約束の小麦一さけ宮に来て　法花
十里ばかりはれよくへむかの
宮の禁中少殿堂にておもしろき　法花
て直ち別しと門の出　付　菊
何云へら掛元法花寺坊主　里
多門と申おしまし京のいせ遣　英
ゐ物ちおくり義のたてゆひて　菊
尺ちと掛小箱のたもに　法花
書写蛮元貴れら紙たる丈　英
所ちの出云向ちと遣ようと遣　里
長持ちか寄の仲宮ちはしと　法花

くくちとちとのたれる書　菊
稼ちと一ち掛ふ坊の上　里
概の角はたちぬ・貴穴　英
演物の生ち信をはらふし　菊
ち結ぬ嫁ちんくちと内御　法花
月ちち傳業前のおちろひ　英
ちろ紀のら菊すの為のうきし　里
物れて来て栗ち板ち様の事　法花
付信たちる結ちもの紙　菊
割ちと長刀板の者の御　里
まふちと星のこれれられる　英
引立て学理ち学ちち為やき　菊

手ひと火入手義すくまもの　沾荒
花ハそれ踏ふぬまの色ちれて
淋しのしらの白ゝる河岸の水　里

涼川とやうて
宗匠の花火手ゝ麦の隙　孤屋
屋の主新の付ける海川　菊
上張を通さぬ仕ちの雨降て　盛水
手ひと取けハ風の高　中　利牛
霧雲と消て初しの如雲の月　菊
雲ゝと帰のころふ秋風　屋
きゝくの蕎のこいち時もして　牛

吹の仕ちれ立丈するし　水屋
姉をよい雲ゝさゝもふゝ　屋
俳句の作へえ踏をやる　菊
風ちゝ形的鳥の帰ゝ　水
茶のふうれ法を見ける　牛
鱠汁義のようゝ　菊
茶のうい豆をけて実ゝ　屋
此表ハゝゝ花の静ふる　牛
うれし物をゝをきて　水
雲の作吹ゝ月　屋
蕎麦丸めし地ゝ作る　菊
不取れ陳と中おゝ茶　水

そもそも坊主を上へ向うとす
法師の心を出家に成ぬふる
舞わまれる事を喜ぶる　生菊
其のかをすうんてらあか、汗をかく　屋
家を造るさまけう　婚墓　生
その写す家の向きさまして尺る　水
手貢　陽さとかくられうう　屋
直実を祖父の白髪のめてしさよ　菊
塔恩をうぬ七夕の思　水
名月の写人会をふる芋畠　生
すさしいふ前ふ義の向　菊
時ふろ前の通りとすきし　屋
生

山の松陰のあるすすく　水
横ふるうるしの実をる　屋
さるるの上をひをふ　鶴　生
花尺と女ふはうう歩をく　菊
よの写れすすれんう　水

十三夜　晩やをはけ　兎外　濁子
小福の　鶴のこをふ　雪　曽良
焼飯を瓜の粕漬をかけて　菊
花　敬　麻の加ふ四十年　はく　史邦
西奉行宮の干反の志めりかい　秋風

こすみうぐ流れて風そのあゆ　盛水
きう麦をちやの新茶を立て　凉葉
春をとゆけば栗橋の舞　菊
松秋をたづねて拾ふちの門　良
ひとうやうの光のみのこしへ　子
泉は春をとゆ陸さぬ光をさ　水
流れうてむ柿　菊
うす月歌麻の衣の影ちし　秋
言ふ月の言ふ菊うる　風
寺庭を行ふ秋宜　子
落ちたふ氏急の生　紫
先汁と笠を紀ふ　菊

こうひとう時て新すれば
初さ光も暗をとうて一名切
中ようくちるむ光う・孫　元
異見を庭ふ作て情の時て
新ふ仏ふ錦陸の春
生ある陸庭の牡丹を帰る　秋
雑ふ　もるをられる　紫
笠ふん栗のふのもの　菊
時ハむくて河ふ　水
よられる光ふ梅雲沙ふ　秋
伯母の法ふ酌人かうけ　良
ふの月実枝の梨の種うけ　子

枝もく菊の折りちらしたる
をかしかりしかたうちけうる者の書
陽うかをめくりけるに者良
初度ハ人しの如く安うて水風
かうしに屏風をくるくるとる紙
花をもてやすもの紙かうしうを絵紙
をやの絵合のをもしろう

菊

十七枝をとりうつしかの
彩色のかをとかうるさし触濁子
ををを手紙陽相をみ付て紙水

扇の枝ひしに朱の扇次依て
尺之をハ五枝ほうの無切外白子
青葉葵つるの図をめぐうる菊
ようつきのるに女房の兵ぬき水
取すうるめうす山伏の数菊
若宮子手はけめて宗雄なり子
ちくしの舟して学の為をきく伝
彩の菜と茶ハかうの言うて菊
化粧也梅桜掃部すず味子
椒の枝おろうしうるの舟水
姉ちうけるの義入馬蒐
ひうく位古を治をきうけう子

うゝみくてゝや琴笛のかゝ　菊
あゝうゝ十まゝ色き花さゝう　菅良
瓜をこゝる物法の法を物　水
手紙を法師のゝ人ゝ泊しゝ　芦
志ゝ手ゝうゝれハ瓦ゝかくゝう　菊
指付ぬおゝ方ゝを方ゝかゝう　子
ゝれハゝゝねゝゝゝるゝ数　良
文川ゝゝゝや青の漑を踏ちゝく　涼葉
色祖のやゝゝゝゝ為ゝゝ陸ゝ　子
香立ゝゝ米の茅を繰ゝゝね　菊
ゝく大ゝゝゝゝけゝく水　葉
雨化る姿仰ゝゝゝ水ゝゝ　子

大原の俳屋四畳半入しき　菊
数おくつゝけハ生と富ゝし　葉
「ゝのみゝとに触ゝ　子
初叶雨六里の松を待ひ来ゝ　菊
むゝ雲雀のいめめけゝゝゝ　葉
ねこを水鶏の起す初きめし　子
筆ゆゝすゝゝの赤ゝの色　菊
色ゝゝハ雲雀ゝくゝもの山　葉
ゝ飛ゝゝす笹の雨布　子

秋雲月世ゝ法川ゝ卯興
振ゝ社原ゆゝれしゝいす蒲　菊

[illegible]しハやすみ[illegible]する事　野坡
毒医ら樋の小節を抜ゝ　孤屋
[illegible]山[illegible]　利牛
[illegible]木の安さ玉の雫　坡
[illegible]の[illegible]を[illegible]舟[illegible]　翁
墨さく[illegible]　牛
[illegible]ハ二十八ね　医
[illegible]ハ鮒[illegible]軍の大[illegible]し　翁
[illegible]　坡
[illegible]　医
[illegible]　牛
上[illegible]の干葉きさ[illegible]ハ　坡

[illegible]ぬ[illegible]　翁
紙貫の七[illegible]　牛
[illegible]川[illegible]　医
此[illegible]の[illegible]　翁
砂[illegible]ぬ[illegible]　坡
新畑の[illegible]　医
[illegible]れ[illegible]る[illegible]　牛
川[illegible]の[illegible]水[illegible]　坡
[illegible]の[illegible]　翁
干物[illegible]　牛
[illegible]の[illegible]　医
[illegible]用[illegible]　翁

又法師ハ[illegible]むまめ産ふ　坡　孤
[illegible]大蒜を四つの清　生
[illegible]むの松の花　坡
井[illegible]て傷寒合の傷[illegible]　生
[illegible]きて[illegible]を[illegible]夕月　菊
[illegible]出て秋の野[illegible]尾さう　生
[illegible]の[illegible]ゆる　孤
[illegible]ゆ[illegible]を[illegible]ゆる　菊
月[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]　坡
何[illegible]の三月中[illegible]　孤
梅[illegible]の[illegible]ふ[illegible]　生

芹　坡　孤　梅の四月の[illegible]　菊
[illegible]て[illegible]む　餅　渭子
[illegible]　涼葉
[illegible]の[illegible]を[illegible]　菊
[illegible]む[illegible]の柿の木　子
[illegible]の[illegible]の[illegible]　紫
[illegible]の[illegible]の小村を[illegible]き入　菊
[illegible]の[illegible]　子
[illegible]る[illegible]　葉
[illegible]ぬ[illegible]　菊
[illegible]ハ[illegible]　子
[illegible]ハ[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]て[illegible]

和田秩父もひとり居堂　菊子
掛乞の声ハ詞を呑みこゝける　菊子
よそよそしき角の板打戸　菊子
出入しゝて鼠の鳴れる　菊子
松をすしきさゝ念佛のこゑ　菊子
窓ハ狂いのちりうけのうけ　菊子
彼岸ハさ先ぬくもひすの声　菊子
重ねて書きて下の清ふれて　菊子
白紙つゞり一帖の紙　菊子
加藤や長ゝ良角の紅海　菊子
名物をのきく安義の屋高西　菊子
る作ハ尺〳〵如伯母さ悔〳〵　菊子

元来そのゝ酒の奥屋　菊子
焼立て麦の角餅する　菊子
まもるまくも朝宮大使　菊子
大宮舞ハ仮能更子新山て　菊子
うゝ為て屋の市て立まる　菊子
よゝ行と特花をなめて後中　菊子
紫菜蕨まて床のかゝ湯　菊子
町をすいやと板帳を敲うて　菊子
酒をゝ〳〵忘物の酒の物警　菊子
うすう垂の上子ゆゝ乳のこゝろ　菊子
俗の蕨をゝ〳〵もくを　菊子
形花子子供のすゝる蕨　菊子

さつ松植る　て　秋の雪　子

音羽や野路のうつる白の端　菊

さけてうつるさ大根　野坡

夏草ハ丈をくく橋を掛初て　〃

門子　旅もまた月のあるそうれ　菊

をしりも秋のうら寂のさんさ海　〃

四一音ハ寒の俳手貞　坡

七十二ふるを悦ふ脚技拍　菊

三尺通り黄のさし　月　坡

涼しさ雪田の出崎ふくさ　菊

地とる生社方乾やすむる　菊

墨深千ちのをとらのこん入　坡

千ちう成る加の茅　〃　坡

柳陰ふ地名の花を咲ねて　菊

跡子跡紙仕て剥す主節　坡

田の中ふ場をぬ石の手師　菊

生千毛仕く月紙ふる　坡

花の舟祖父ハ山て成ふれう　菊

綾ふく栄ふすまの義本　坡

〃唐崎ふ青の跡後を引ちし　〃

ちひ廻るふのようふ百不

煮合を松敷のふる藪の岸　菊

坡の詩をいとなむ雲夫　菊坡
手ふるとなかへ見れば桂のかげのしし
注て酒のむ花のゆふ方　菊坡
ぞうしと桂子風のゆふ方　菊坡
猶ぬす人の魂を負やる　菊坡
月たれへ親子不足の山朱心　菊坡
ふれて家ハ名ぬかへ　菊坡
仮工剪て立ふ八保縁ふ　菊坡
仕付て家ふ舞才の言　菊坡
田を植むひ近江の猶の山朱
て舞ふふし宵の神仏　菊坡
此中蓮菊不適意句多故不備韵而

終ふ

生ふふふひふ山ふる生涯乱れ　菊
菊けハ自ふ宮ふ菊の　蕉　武水
代古の仮ふ子ふの身ふ見ふ　菊
五風ふ桶の梅を八ふふ
酢の物を持れハ御ふ引てり　水
ふふふ越てふふす　菊　波
歌の時ふ中ふし醫ふの山ふふふ
出しき郭ふ雁のふしふ　菊
香箱の一ふふふふる秋ふ　水
旅ふふ物ふ初ふふしふ　菊
粥　水

麻衣をうつもるる木葉の谷　菊
中稲の穂ゆれをうつる風の手　水
何ふとかを買うて酒清く月清く　松風
佐々夏て耳に調の音けき　水
造りをて村を呼て千の風　風
うけてをられて絶て飛　水
初雪のさらふ雲八重をうつく　風
作賀後長男と山のうつ尺る　水

いさみを奪引ぬるゆるれ水　菊
ふるれのまくる枯ち名子　法圓

馬蓼
有ふるもの居おくをさして
三味線さけ旅の気合　菊
夕月秋空をうつふて更しける　恵
ふすからそうる秋ふきく　芙
ウ変おおよ後ら訪ふ弦の音　菊
大笑の紫井幾年ふる　恵
力ふく紙わうしくべひ　芙
張ふ一のひも木陰もの　菊
村仁妻ふ葉ふ張しむ　恵
ゆ川きを仁のしをさこけ　芙
弱の誘十二ふ水の坊ふ　菊
低尺の格をうふ京の名残て　恵

惜へくんして入る夕日哉　芙蓉
秋に しとられうおそうあれ　菊
月ぜの香うしゝ仕せうを皇　麦
改作ゝらして鮮ハ破　芙蓉
深あのとくゝ蔵ゝまえの風　菊
門の方ハ犬　猫いてさする　麦
外の雪ゝ一切ゝ雨の滴　芙蓉
蒙ゝ雑　色をもゝ惜九　菊
鳥ゝふおれ　おれゝハ紅うるゝ　麦
雲の洞江の山ゝ　まゝ　芙蓉
入ゝを松ゝ　しの竹　庵　菊
仏法寺を　仏ゝけすゝ　麦

五紅の小袖ハ縫のあるゝて　芙蓉
異洲の系譜を笑ゝ　菊
ゝ浮の二時を花ゝ　麦
月を眺ゝ　癖　病をきく　芙蓉
狂ゝ物の一ゝ　霧尺ゆゝ　麦
増ゝ　孤　麦ゝ　柳ゝのきゝ　麦
秋の雲ゝ　ゝ　ゝ　芙蓉
寺加帳ゝ　ゝ　ゝ　麦
不ゝ　ゝ　ゝ　芙蓉
四方の谷ゝ　ゝ　ゝ　菊

雲やちる笠のこゝろ浜中さて　松風
刀の柄千　おろる　拭　菊
ゆうゝし木ゝゝ折てみて　盛水
秋末てゝゝゝ弱蕎の塊　依〻
野しハ布をを相撲等の月　曾良
研て　拵の市　判　菊
高ゝゝ千ゝ紫の瓢を　水
ゆうゝむ麦ハゝゝのふゝを　野坡
白檀の梢ハゝる林千て　風
数をきゝてゝ笠を作る　水
幾蕉の物ゝの松ゝ押ゝて　菊
もゝひゝきゝゝ今ゝ　良

義ゝゝ作ゝゝ　柏　風
出家物をやゝ上る　し　坡
ゆゝゝちゝゝの月　良
ゝ茶のゆのさゝ失しゆく　依
初ひハ蕉掃ゝゝいゝの瓢ゝ　坡
塀のつゝ木千ゝゝゝの沖　執筆

いゝゝみ之雪引ゝゝゝ　里圃
ゝのゝゝ家ゝゝ　孤　佐圃
大根のゝゝぬゝ千ゝゝゝ　菊
上下ゝも千物ゝ菜のむ　秋　馬莧

所きうに角尺の法の集め陽　法
爲ちうしと通る　次　里

きうれ一所にて據をる悦き　廿角
長塚もゆつる陽谷の石
出代の爲物を手うち賀きを　菊

梅ら魚や通うられハうの吉　毛紙
出元　陳ゴ　在　晴　る　許亡
陽谷手所朝の生の拔ぬけて　菊
きゐや麦の中酒く多の吉　木導

陽谷いまむ花社急に　菊
出元ゆや音の踏ゆと三ヶ一　利平
却ゑ一やく結るの細かう　盛水
業ゆうを永業の法ゆきう拾て　菊

野こは立圖ゆう毋方こはゆうう人
ゆう服ゆるを手ゆふ仍て似号
をゆうゆう古法を考ふ
結ゆうて名手をふのう人を水
実極の據ゆうゆう　吟　法圖
実ゆうの爲て東ゆ戸を分て　菊

古將軍の古宅をたづねて
月やどる昔の宿の木ぬれかな　菊
故人なれば折うるの美　法園
あるじなき廻文の村雨哉　其角

雲の松ぬれぬ秋さぶし　秋色
ものいふ蛙あれ寂寞　孤屋
二番を一船こぎ分けて　菊
百ときこゆ大久保の供　子珊
月ちらす風ふかぬ夜有秋　桃隣
栗をかしまして唐土の色　利牛

ものゝふの大和若武者　菊
一面ゆく木うゝしの香　玄角
京枕抱ぬ詩を織て　舟竹
火ともしころ古里の内　菊
物の葉のまゝ言かなて有の色　角
うしろをこえをして物ゝ寂寞　竹

元禄七甲戌

梅ゝにのりとるのむる山路哉　菊
ゆきこゆるしてゆ終るの峰　玄
京夢語をまのあたりあはせて　野城

上の句より千切りする米の直　菊
香のうちはしらしとき月の空
数こし嘶す秋のさびしき　坡
お所〳〵菊もふるいなを遠き
娘をかしらし人手のとゞかぬ　菊
東云通じ同しく清きる羽蓋を
こし八角の陣ぬ白　坡
鉢ふる味噌ふるやる白川芋　菊
ひとしいもいまお袋のこと　坡
ゆきすぐる尾の杉おゆ病をおきこる　菊
菊菊はうゆ球ふる名　月　菊
初月ふく垂掛云地蓋て尺ふ　坡

ゆとあるまて居合一めゆ　菊
河底の清ふくと陸し花のうけ　坡
門て初さうく壬生の京仏　菊
こうふ月蓋の山をれを迎し
只乃ふるまに脇ふふ　坡
江戸の方角の寿之のふれて　菊
ふちうさいれと雑をうす　坡
方〳〵十夜のうちの陸の吉　菊
桐の木言ふ角さ角さし　坡
門ちめてたつて窟ふれ　菊
拾ふる言て初ふくすふ　坡
初年千女房の秋ふ旅菊ふく　菊

まさ世まもすりぬ字人　坡
世市の酒酒を呑る花さうう　菊
徳多をいてまき麦のむ末　坡
竹の家を来の方を重を内　い
魚をうひ泥酒の鮮物　菊
ものう俗一歌しを宝来　坡
未を の言の をてぬ寿用　菊
晴くをしうきて晴を生て来て　坡
屏風のうみる尺ゆる菓子重　菊

篠の家をうかみ一義小　菊

牡丹のもゆ和むむ屋場　千川
みしう歌て自ハをうぬ那して　涼葉
碧をう を きく詩を持う　左耕
をうう八稿ものの年義　川
出口をする金山の砂　菊
吹ウ伝ゆ秋をおをすけ紅　坡
いりを茶のをよる端の茶　紫
犬のるれ酒ゆれぬ俳紀て　青山
稿ゆう句をかりをうやを　川
家俗ゆ曹湖ものみをめ　菊
徴のひきうのる自代　山
せふう解ハ能ゆ作れて　紫

すのこ板をハえ巻しく　板
巡礼の頃し旅の身のうら　川
見ようと見そめ　菊
花ぶんと書る名所の賀ゝ　山
くるくハ梅さきる家　紫
ゆゝしき海路家の賀を忘ぬう　菊
ようようくるに木の　略　此節
海辺の浦衣干ものをかたうひ　紫
重の彼れ入る小　船　板
さひしき積る川をハるゝ来て　節
旁の中の紀ハ月出の山　遠条
萩屋手負の栄をかうてく　川

海辺の門をしくく月の秋　紫
人足の費用引ゆふ茅つゝ　大舟
ふを見れて笠紀尺をうう　菊
茅むゝとうけ　紀　敷　糸
海ゆう雨つさく　蜂の言　節
隨分のかさ笠をつくろひて　板
火ようかやきし　門の孫　物　舟
院内ゆ守法川をゆ波の等　紫
嘲ゝまれてやうむ家ようう　川
此ハ月ようう家の花のうみ　菊
地のせいの尺雨つ　曲　代　糸

[illegible]ゆや藪を小屋の名ゝ殺　菊

[illegible]ゝ雨　百千　仙ゝ　菜　信　子珊

[illegible]ゝ朝ゝ[illegible]ゝ　[illegible]ゝ　[illegible]ゝ　杉風

出芽のおゝ[illegible]　起　桃隣

けんゝ[illegible]ゝ　[illegible]ゝ　[illegible]ゝ　[illegible]　柱　八葉

楊[illegible]ゝ[illegible]ゝ　[illegible]ゝ　又　来　菊

[illegible]　[illegible]ゝ　[illegible]ゝ　[illegible]ゝ　[illegible]　珊

[illegible]ゝ　[illegible]ゝ　[illegible]ゝ　[illegible]　風

[illegible]ゝ　[illegible]ゝ　[illegible]ゝ　[illegible]　隣

ちゝ[illegible]ゝ　[illegible]ゝ　[illegible]ゝ　[illegible]　葉

[illegible]ゝ　[illegible]ゝ　[illegible]ゝ　[illegible]　菊

山のうふさる下市の里　珊

[illegible]の[illegible]ハ[illegible]の[illegible]　風

四[illegible]の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　隣

秋来てと鳥の[illegible]れて　葉

雲雀の羽の[illegible]ゝ[illegible]　菊

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　珊

ひゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　風

二月の末ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　隣

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　葉

屋の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　菊

五[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　珊

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　風

すんやとうろの八鞆をのうむす　嵩
鉢擣れ青きを汁子きう入て　栗
天女ようかいこかハ引こむ　菊
えうりてとハそれ色の自　珊
すしこれをあふく芋麦の色蒔　風
柴栗の塁さうつすと陸ふして　嵩
ふうう末ようの人子ようのいと　栗
いそうしう一向掲し紙を形　菊
叢ようむ自ひい嵩きう　し　珊
その宮ようさうし朱ぬ白　珊
の月の五窓を鞆子えうむ　栗
鹿焼高お茅形の花うさハ先て　嵩

小舟紙廻ます泥の山ふを　執筆

陸奥　山店

新麦ハうきとすあ麦を山　菊
ずさ社恨の出えうう　〃
る沖のさてさひしを牧の殿子　〃
四五ふ石の和の主　山店
方ようへ驚者を引する芋の月　〃
踊の仙法ものおれ仏　菊
〃寄ふの陸うもれ芋鶴しき　〃
けりうふのう蕎をやうて　店
蕎生ようを山しる宮ふう　菊

湯のあがるかのかゆかと青竜　店
丹波うち後うきはらて帰り烏　菊
其屋の事れと利上きへさぬ　店
やうかいて古意をとはひちし　菊
只京中しとはてきえけり　店
神明ひつうとしかはをあ　菊
きやうう歩き屋ゝ紙れる　店
真の紙をうしもたきし取む　菊
りさうひうひすれ事　店
東のう産家の伽めつうと
かくしやはう清うむ　菊
いそうくられ役をえあらい　店

月つをのうあゝ乳腺し　菊
かゝひゝ撫くやしまの巻き　店
仏の木泥をはゝむ糸角て　菊
こうしと白ひもをい財う　店
うゝうう竹のうう牛柳　菊
朋二帝のはうそまて花物ゝ　店
ゝうは出ゝうう神せ雪する　菊
鈴をと文めまゝ乳の月　店
えゝけを蒸て山菊の流　菊
白光く丹かゝおろう秋のえ　店
うれしゝうのむ米の事　菊
乂見る蕾生り寒き神をり

物すきとやとさすらる夫日　店
花のうてなうちハ雲山をふるつまさ　〃
蔦ゝ紅ゝ　る黒谷の　色　菊

多賀城跡と人麿くやゝ作合句　菊
苗の雫を卵子にあけこむ　霧川
新風ゝ むゝふ金剛を吹立て　素賢
大まめ豆へ　けゝる生ものの　菊
さゝやかに咲蓮ゝ月の秋　川
ゝ刈きてこゝる棕ゝの雫　賢
耕作ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　菊

豆腐味噌作酒酒造　川
尼寺の孫ゝ　蓼ゝ　ゝ　菊
雨の後ゝ　ゝ　ゝ　賢
施孫のゝ　ゝ　ゝ　川
蓼ゝ　ゝ　ゝ　賢
切麦ゝ　ゝ　ゝ　菊
お松の宝北海道　川
ゝ　ゝ　ゝ　賢
初子ゝ　ゝ　ゝ　菊
吹ゝ　ゝ　ゝ　川
打ゝ　ゝ　ゝ　賢

生流す村のさゝやき夕月夜　楓竹

寺柴吹ちらす屋敷村ばかりにて　梅櫻の花　吉来

一枚のむしろ敷たる宿屋　菊

柄をふる庭を古き紙さし　惟然

有新す菖蒲の生垣蔦のこるし　文草

堀切りて小田の中仕舞　支考

紫しハあよ仕事の百姓　素

お腐ハ自うす十五夜ゆる　竹

秋を長き釣うを捨てゝ　然

乃ち鴨の寄やすく来て居る　野明

地迫て松茶ゆるゝ　考

物ふ人ゝ魚ゝ

雨気の寄ゝ

紡苧をうゝ

舊家の菖

蒲

芋

然

竹

東

芋

考

然

考

竹

東

[illegible] 杖 [illegible] 宮の春 [illegible] 菊
[illegible] 菅 [illegible] 然
[illegible] 所
[illegible] 月 [illegible] 脈 [illegible] 所
[illegible] 菅 [illegible] 菊
[illegible] 減 [illegible] 然
[illegible] 桶 [illegible]
[illegible] 吸物 [illegible] 所
[illegible] 菊
[illegible] 然

[illegible] 浪化

二月廿三日

[illegible] 玄来
[illegible] 化
[illegible] 来
[illegible] 化
[illegible]

小屋しき蓮の妹のうら町　立本

謂分のちよりしくと起る高きの　化

梅笑をえて色花さやらけ　化

手中を松の内より斜理喰　化

伊勢の恋ら　のいそうしき裏　来

上紺の木綿合羽かさ持て　化

海屋の手さくハさうし　化

名月の持松五手すくし合　化

一分てさふ梨のきれうの　菊

玉味噌の作世ようう秋の　化

不見れ方を学理おすす　来

方の手の拝ひ次第ひ作し来　化

点うけてやるお役の文　化

世話をさえ以て通う船の頼　菊

寺泊うれてタ立の泡　菊

平めふる原を飛ぶひ城　玉

陸仕をさきをして士う合ふ　化

月をくえ秋の場物を見て尺ふ　来

取果柳ハ枝と霧屋　化

志のふ写を踊うもと思ひて　来

来てうう　すさまの傍寄　化

家ふ　ハ望をひ　ものふ横雲　菊

月ひと多ふ　ものふ横雲　本

春をうる松と花の咲うれ　本

四五人通ふ俳長宗房　化菊

菊見河の多俳の繁昌　紙東

いつくも志ぐれ寺の井

紫かくれをうけむて瓜の美名　吉来

世を松子惜ほの時を寄　浪化

分け苔衣多松の人と嘲し　菊

哉とお供の侍くいとふ

寄世明れ花のうるる角の入　之道

次のくちくしと蝕て長　文草

行はそ芋さひの浮く重詰　支考

惟然

見出もうら見をはうむる　野童

物をし畠見こさす丹波山　野明

そうしめ寄の長物　東

家合八鯨のとれぬさくう　芭

帝ふまけ行燈のさや　学

ちくしふ風花挑て戸を設　考

こうくと我く秦の紫　然

砂川の浦くふうつ角取　童

家志とれくも軒高ふくく　的

百年ふ花の木ゲの店屋物　芭

業しね鐵工函をくうす　東

世ちて撰蜜よくしまの表　学

獵場のうまおもへりし来
彩の間を走るをおさをゆう
餅つくりけて什器をもす
用る板のようにして二尺ばかり
僧上しふさく畜しかぬる
茶小紙を紙の十徳のすんなる
多年さらさと秋八月ようう
此夕月を拭ようう山ようう
鈴ようさけの咲をかしけく
面白つく秋の夜のはつしと
あるいは来しる市の小屋掛
此ようの化物をふし新しきて

雅楽
無
茶
菊
無
的
花

雅楽しく男がけもるる接拶
お屠の里こいしていはくみ
塗るく家よう物のかし入
花の色はきくく出ぬ宮近し
なるれ一ようなる の 物ようう

菊
無
的

閏五月廿二日 蕎麦 吟
柳屋敷に蕎麦ハすしし和吉来
丁引 枝しさる 中の 稈 酒堂
村雀里ようるもはきて 古来
塀うけるしすまお石 頃 支考
月ばるはふくむ舟の 編 文草

小いとうれて行手四つく　惟然坊
上をとそそそそそそふ蓋ふ
手桶を入さお通りの法　翁
疱瘡も金ハいのすくくも　末
大工の野ちゝ鋸をうゆ　秀
外廻のまゆ吸物ゝ唐素の先　然
仮ゝをちちて酢味利をやる　坊
海むいさまゝ雨の走さと　蓋
廻ゝやそそゝゝゝる洗足　芋
寺鯱を焼と転と南方子　末
くろうと雪た樫の木の森　蓋
月花ちちひさま門をゆ入つ　然
　　翁

業おろす吹の上ゝ鋸板　蓋
二階をゝねゝ手付ゝる磨去の供　芋
新茅のかさの浮ゝとして来ゝ　翁
氏ゝのゝゝさをゝゝと格むして　蓋
逆ひをゝゝのゝゝゝゝ　末
うすをの一反ん庵ゝ海ゝ　秀
法おハきんと次の田示　翁
ゝひゝゝの弱を嵐のゝすゝ　蓋
陳の内屋内ゝゝ吹ゝ　然
蓑礼の法て弾ゝむ芭ゝ坊　末
ゝぬゝひ狐ておろすの菊　秀
りひゝゝ渡して言ゝゝ子　翁

[illegible]の[illegible]田上の[illegible]　[illegible]
正月[illegible]やまとはさびしせなを　重
持つけよ本つとの名代　本
吹雪の行[illegible]ぬ埼松魚　然
ひうんをうけてお降さやく　[illegible]
白粉をめれども地[illegible]以就　考
紅赤拵松の[illegible]の[illegible]　本

夕[illegible]や夢手埼をうえ世瀬　百有
面白をふきくく数の云芳　翁
ちくとは海よは魚のけを立て　惟然

[illegible]の中[illegible]ハ[illegible]れを人と　野明
一景の孫て海[illegible]れの自　翁
稗手結夏[illegible]庵の埼[illegible]　然
松茸と小信村ハ[illegible]れ　竹
なるものはよ人手かて　翁
蕎麦の[illegible]新屋の口[illegible]　然
旅の新[illegible]手瓶さ[illegible]　竹
まのひとりいひこと[illegible]仏呼ぶ紙　翁
[illegible]の百手いく[illegible]　然
[illegible]と[illegible]家[illegible]の寿　竹
米の味[illegible]吐さとの稲　翁
自新[illegible]名海の海[illegible]て　然

夢のわくらゝ初瀬の晩鐘　的
花のあけぬ前のいくもとの　菊
去ぬるとしの草ゝの名残　然
[illegible]田屋行者の前の通り　的
伊勢の社畑を料理屋ゝ　菊
柳の木をすゝとふの雪ゝ　然
屋ゝ[illegible]ぬ屋敷ゝほくゝ　的
保ゝを[illegible]ゝ[illegible]の自　露川
きゝすゝ[illegible]ゝ[illegible]の中　如行
秋もくれいろ〳〵ゝ[illegible]ゝ　松星
合点のゆゝぬ事のむて本ゝ　夷始
紙ゝを[illegible]ゝ[illegible]義主　的

本ゝ地付て取く音　露川
作ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ　如行
[illegible]ゝ[illegible]ゝ上用のむ本　星
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ　川
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ　的
[illegible]れ[illegible]ハ[illegible]の年ゝ[illegible]ゝ　星
[illegible]有　赤ゝ　強ゝ　樗　歳　如
昔ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ思ゝ[illegible]ゝ　的
ゝ[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ　雪　[illegible]

みゝ[illegible]ゝ夢ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　[illegible]有

西ゆきをふきくる蓑の六芳　翁
ひしゝと波濤の能の法さえて　惟丘
すのきゝうハこゑも人し　野眼
一夢の陽て海をゆゝられの月　翁
鍋ゝ結蓑ゝ庵の時ゝ　然
松葉を小俵拵ゝ　吟
ほゝえゝ生をゝ人ゝゝ　翁
基石の作きゝ新屋のゝ　然
旅の袖を手風瓶ましも　吟
まひゝいふてハゝ伝唱ゝ　翁
その写手句度志くゝ　然
めきしとりうゝ言ゝの春　吟

朱の味ふゝ円墨の絵　翁
月新なゝしこの海ゝ石ゝゝ　然
夢の松くゝゝ波濤か入　吟
花の色手時ゝ小ゝのいくもゝ　翁
ゝゝゝ芋ゝゝの竹　然
陽炎ゝ田舟行先の蓮は通　吟
竹ゝの蝶ゝ新理先ゝ　翁
松の木をゝゝゝ風の吹ゝ　然
尾ゝ張くゝゝゝゝゝ　吟
うゝしゝと松ゝゝ君を秋入　翁
豆腐志ゝゝ月の月　然
美しきお城廻りの豆腐の　吉棄

合羽いろくさ芝原の雪　之道
時ふる頃後ふる也屋の雪　吹
沙尤の役手ふるぬ雪　末
多ふしとを波入ていとをぬ紀　然
松のみとりのまつ　吹
ふし雪の屋手ふる二人元　末
つきいろくさ文の赤坂　然
手所しきのふの平ものうを　吹
梦おしとをあ相形る屋袖　末
新波なる花の新所ふれる屋　然
みそさそ　松山　吹

文の形やうとして吟物　翁
雪をそそ雪をと芝の根先　出翠
雪ハいりをのはとふをと入て　所高
古文葉篇工夫有相しこむ　性然
月新ものをとをる雪の芳　文秀
志ものて跡をとをける梅　翁
物を物埼のあ（ゆい道）し　翠
山ふる石子芝を古てむす　宇
飯糖ふる面橋ふをむ火打袋　然
きて工夫をしふる四津　秀
おれふるの雪ふまて格の香　翁

お佛の息子多なさしうむ　翠
雨時千葉とおえしめえこ給　彦
秋風うさる門の尾風呂　然
下葉て紙山初る月のうけ　亨
尾張てつきしえの箕千振る　翁
餅為のたしの豆子ほしくされて　翠
正月ものえりもよこさます　亨
春風千篝請の誰もういはすこ　然
藪から村人めけつ東え　彦
ふいうの如舞も男もはきぬる　翁
白雲の対ゑ山代千ある　翠
芭蕉を捧け付る猿簑　亨

うしいえる卯有時の宗　翁
お前と話名千ろ矢木の町　彦
隣の女和千雪の筆をひ　然
虎うこしきを海の刀をきし　翠
君御の分そ毎人ほりける　亨
射付しく箕来る月の塗　翁
そうしほりく魚の上藤宿　彦
ニ法蔵詞四条の角のは京町　然
言激をほくるおりて一園　翠
今の下り椿もえ候す椿の上　亨
大きくれ障のとんえ千筋の油る　然
生おるむきりも尻おしようそて　彦

[illegible]　友樹の下　方

のうしと打る扇や雪の蜂　翁

書禁ちつく文立の初　安世

波を蔵す舟を多待と尺迄て　支考

くゝられて家を化に京中　宗房

月の雲猫の新る雪て来る　太祇

大丈夫の[illegible]峰　丹野

かゝりさをよわめて成る秋の雲　芳

直うゝ帰る人の[illegible]侍　翁

さりくゝと物を見為て走を行　去

秋の月ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ海際　考

以ふとを付るとうれして　祇

去角の月ゝ新を吹ゝ　芳

雑紀るむするの居る係の上　翁

をるゝ江戸の芋小の末る　緒通

まいとゝ[illegible]ゝ中の恩をきく

ちつとの[illegible]枝ゝ[illegible]ゝく　祇

月もを礼の[illegible]ゝ　考

ゝらけゝ[illegible]猫さうゝ　祇

石垣を[illegible]ゝ　芳

背ゝけ伸ゝ[illegible]ゝ　去

こくめんれ伊万ゝ家て不斜　考

中々にふとむしてもの驚かるゝ　臥
絹帯に跡をとらせて老かはく　乾
冬塚の町みを付も尼さ　翁
明月の餅よ盗する菓子箱　葉文
たゝしハいつもきまる月ちらり　通
萱葺ハ志ろかりし障子秋の雨　去
いつ伐ても詠め上手し　来
女房に出られぬ老の恨して　臥
尾をたれ武士の二番てえとも　乾
去年の秋の露竹ハ枝千代よかり　翁
門のさけ附手ふやき不二垢離　文
坂のたちへのてたねと女の肩　翁

酒姉とえきし付て香なし　去
病ぬいて砕目よき花壇生　通
聖ちるく向もたすれぬ　乾

六月廿一日

秋ちかき心の寄や四畳半　翁
志とろに伏る撫子の露　木節
月残る夜ふりの火影打消て　惟然
起ると沢へ下るせきれい　支考
陰ましくむしみそれの一志きり　翁
ウ
手のひらふいて獅子細工する　翁
夕飯をくふて味の絵を待　来

何の義とも弁まつる事なく大きさ
者にして世のかなる空蟬さ　然翁
うちし　雲の中なる月の影　霜
仏種の深るを月のさしうつる　然
深うう　弓此　義う　秋風　秀
八幡の礼ハそこ　仕者う　義
舟岡の鶴の時分　そう　翁
西方浄土ハ地獄　れの如る雲　秀
おりうすう　醫者の手尾　然
陸うみて西瀧　数花の垣　苦
之袋　絞しあす　豆の頃　秀
手礼ちひさて　供さて　翁

かくまうあまう　絞立　然
行燈の上う志　敷付さ　然
夏手　其花を　翁
半数八四面る　面を　秀
竹の根をり　ありすさし　然
志さし　立の根把を　苦
蛸　もう　ふ　秀
立八　れ　苦
王　う　火燈の百　翁
数　て　物さう　苦
木手　ト　もつの　然
満化手中絡志　林をし　翁

梅と鹽とあるべきもの　梅

板ありとても酒にて猶の迎ひき　酒

さまざまの物をかかふる掃除は　秀

花咲ハ菜摘みくしやうる素の山　菊

清しきの船る赤ちの岸　然

松茸やしらぬ市柴の庵さう付　菊

秋のよ和ハ書しかい寸法　元代

宵の有河系の花を中ほしに　文秀

こしハきしけハ里のうつ赤　雪芝

四五人て茶ニ仕舞ち支　徳雄

いきうしし初手鞠をまうる　望翠

ウ

ケ郷の雪時ろうしハしかしと　惟然

屋風しこんと猫ハしかしと　車儀

ふんしこ上州米の元さちた　代

ろうまの高もろうの金さう　秀

嵐ハくふとんの上の寸味ろうハ　芝

風手ふてふる八ものの雨　雄

いてうしき仏ものくしに木茶ハ　嬰

三手ふて嫁ろるのうた　菊

雄のきろうふ人手ふうきろう　袋

きさうもぬ仏ハうつく　萩子

初雪の頃手古仲ハ如し　然

[illegible]ぬ角の紙に　代　袋

はらくと結る小菊の枝さされて

秀

[illegible]豆殺屋の内

手切のちひさん鳥手角を入　雑雑

居風呂の湯のうめか滅ちて　子

二三本伐しれハかんくと　秀

[illegible]宿の燈籠美人屏小屋　菊

破られて枕ゝる琴の弱　雑雑

[illegible]きりゝ[illegible]仕る　芝

味噌蔵の青[illegible]つとて　代

木綿を屋[illegible]たゞ[illegible]　袋

[illegible]の[illegible]を掛た菊　雑

[illegible]

[illegible]る雲　子

[illegible]秋ハ暖の[illegible]れを焼ひて　菊

[illegible]と俗とのゝ[illegible]の[illegible]し　翠

呵[illegible]ゝ[illegible]焚付[illegible]の云　芝

[illegible]きゝ入て[illegible]る[illegible]ける　秀

[illegible]屋[illegible]唯[illegible]のいゝて　雑雑

[illegible]の南ゝ屋の[illegible]しめ　代

七月廿八日猿雑亭庵席　猿雑

[illegible]て[illegible]ゝ[illegible]く[illegible]栗の雑　菊

[illegible]のかしゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ　配力

[illegible]

葉のもみぢ之姿の敬
うつくしと物をおろす鋏を取　望翠
きくらべさうに待いし　去芳
燭基のちひさきをやをそ　卓袋
ゐるをと地こをとをとをる　菊
焼食を割てくゆの冷くて　桔
おもひ屋てもぬとうう　翠
ぬるるハ扇の安きをしし　芳
湘南のおまてちをさ　錆
紙をのふ屋いををぬるし　木白
角かをやけていをとを　力
ひるけハ山伏村の一ツ屋　姓
菊

ゐりとをかをし村の姫の栗　錆
様をして染をうるを屋の光　芳
去ををさををまをれをる　菊
掘刻の川除の石清をかけて　翠
ゐ南しをすをみを所ふ　白
大名の供の長きの末とをを　力
命ひの嘆のおうう血の巻　姓
一升を代ををを麻酒の物　菊
雲の屋をあしををにより　翠
煙火を華屋酒工の松ハをを　芳
籠ゐ者ハ　桐ををの先　力
第木元前めを生て義ゐし　菊

千かくのつのたんくの月
祥主の涉供を於て上りて
きくくく岸の体に筏士
衣をて成するうろ新し
かたくさいる軍の家和
耳儒をてうまやを横たるき
彩義の慈に庶に天
大きくの情引かみる花の落
宋の詩をめしくむ二 月

経 翠 袋 菊 芳 経 翠 力 白

作ふしと第をもて板賓か

望翠

牛のくもをを和ひし峡
彩角こ雑きを、底を振て
まれいするほと豆腐をきる
大八の通りるる蛟小筋
明老の島に編笠を見て
疲ものれ伝ひくく川おも
理中へ生を魂かくやる
踏入の事しるるかまう
杖とを辰を杖して至
一位年へきを立る春夜気
髓酒をかくの海
大きのまうて四る鳥千き

惟然
去来
雪芝
蕉雄
菊
卓袋
九節
芝
翠
蛟
経
菊

蕎麦粉をふるふ蜂子の旅　袋
立かくるみちしをく見寺の鐘　醒
跡おもてし祖母の沼　翁
吉野千花の木かけの一様　芳
はらやゆう京む春の山風　醒
二
旅籠屋にぬくつきゆけハ出る荻　芝
うつひの又ころむるまとわめる估　袋
冬枯の丸手毎をしむ東雲ひ　翁
さもしきまれハ居風呂のもつ　芝
おき榛の一月席千ふいりつ　翠
あ身つゝくハこれ徐かハまし　芳
雪の日入られける芒星市　芸

草の香りの蚊やり也小葉蘆　芝
首かれかれハ又尺さく和る絵の梅鉢　醒
もしも手よる亀坂の秋　翁
夜明すきは隣て了としつ　袋
三
雲晴ゆきよ頭痛止より　芸
引立し前よりして蓬萩の門　芳
ひとりうきかりそふ古帙　芝
ふもしと粽食に付る貝のかり　醒
いさかゆくさまぬつくね風　竺
さハしと京の浪よる大手先　翠
松の手ゆかしき去年の若松　袋

陽の蛟手殆きもとゝる所なり　雪芝
併蕃ふゝ手尺とるさひ船　菊
夕角の光る樹ハ実ゝ重ゝて　古芳
うす柿いろゝ吹る頃　風麦
分をそゝめ二人連立て　玄角
こゝろ行至る雲の切かの　紫蘇
蝶蕾を目利のうちに付て　菊
殉しゝき門の船　芝
大木の梢ハ枝のうむし　麦
叶ゝ麦刈しこゝゝ信物　芳
山伏ゝこゝ嵐と来て礼祝る　蘆

一里行てもとゝる所　角
掛物の布袋の身ゝて　芝
百の魚ゝきゝ　菊
秋風の雨かろゝと川の上　芳
かゝゝ舟を杭し　角
多流山ハ弱ゝ花の吹掛ひ　菊
ゝゝとする処ゝ　蘆
二月六日の弱ゝ　角
ゝゝ吹ゝ手ぬゝ白のゝゝ　芝
のゝれぬやゝゝゝ八束数の寒て　麦
紫楚ゝゝ行ゝ　芳
竜竹の杖のふゝ　蘆

しらぬ山路をたつねかねて　角
ウ
菊かよひきを見くる書物箱　芝
芝のうけ手祈る帰さ先　菊
世にあれや身を詠る人もされ　芳
塔見のいそれをかさゝの梯　麦
をひきる能より海流ふうけて　角
月をひする影にほくれて至　蘿
松風す新酒をすゝす夜寒かな　支考
月もうそふく石塩の上　蘇路
河の門おいての庵の飛ゝえて　菊

見そハ塔名の猶を引する　雪芝
世のよもおりしまゝめうつくしと　惟然
この山すゝて桂るやすけり　卓袋
庵前あつる草屋の屁八まれうつて　望翠
床て天窓をとさへしと剃　考
ウ
夷ひす縫行の能をすゝ提て　路
嗜嬉の中を覚引のけ　芝
仕合と矢橋の舟をのゝかんさ　菊
ゆふけと鉢のゆすれるつゝる　翠
やまし浮を露に清ぐ居て　袋
大工屋松屋の帰る笛る　菊
月のある時そうけぬ藪　睦
考

白の塩ゆるやう　芝袋
きハ毒草てを同一　秀
親といふ字をしていく秋　聚
自新千又ちくさ黄金仏　経
かりさ義為の名の行はひや　経
咲の花千毎年　嘲千老ちう　蛇
訪寺をうけて住ちく椿　袋
寺と特のけめの結る歩て　芝
由来の為ちる住ちれつ　秀
芝場の門のさい入ちちる　経
一里の舟と後のすむちる　聚
広ハちれ密相めきの黄千来て　菊

なるれてうる畑の家　秀
毋方ちちる紙て角の物さひし　芝
嵐の義ら老　集の中　袋
侍宝の野を話ふ入数の白　経
さうれかちく好て風ハちむし　芝
小食ちハむうひ金きのこの耳　蛇
ちんとの風千人乱うかう　秀
ちちちちなる古社鄙ちふて　菊
ちうけち話の変ち　経
鄙ち合ハすちちる為春　聚
か減の集ちけちる為　菊
消残をちうてちれハ春　秀

こぼれて生る籾の穂の
初霜の菊の花をとゝのへ
何ハ咲ぬ中に
枯ぬきをふるゝ梅の枝
月見ていりさ迄やつく
雪をゆるしとする秋の風
濱のか家をさゝる白
惜て立出し
いそぐの齊に白雁の
雲隠の夏より飛く花の枝
松をつゝむひすの明

紫
桂
芝
紫
秀
聚
然
紫
秀
桂
芝

發句のもれる事の有
なを寄られと新あら
水かゝる池の中に芦ゆて
藻仲ましる柴をいとく
雞ゝ行るとやうて芝の月
通ての赤さ天足之秋
ウ
參仕菊一筋て立きる鶴の魚
屋敷かゝをとをしゝ
聲ゝ来て夕りもさゝる物淋
中ぶよりは此の吉
鶏ゝめゝハ月五ゆ振菊

作圓
菊
支考
惟然
菊
秀
然
菊
秀
然
菊

いとく明れるうちに雪の葉の枝の根根然
山手門あるうちの自菊
神崎くらけの人のうけ地秀
まゝ塚光る清のかいうし然
尺て通る紀三井ハ花の笑うう菊
菊おいとうこいとく永ゝの秀
うちの風の又砂子茶かるて然
茶まゝ孫を大うう菊
桜咲の西武ハうち武武きう秀
嵯峨のさとも雪ぬ然
大切乳ゝう二ゝ雪ぬ後菊

重うれうけし中の泥色秀
来るけとの家郷ハ乳出家京然
真の寺並ハ近年の他菊
風ようと者のやまゝ月尺しく秀
茶雑所を庭の正面然
さゝまゝめ踊のてゝ乳きりめ菊
霧汗のようう砂方の首秀
うゝ乳を清ゝ子へ越き杜の風然
大工はうしの れくゝ ゆる菊
米橋ようふうとうしうし秀
かゝ多て市れ中を押ゝ菊
此所ようう除生ハ花の寺てうくて然

野のはるのさまめけめる　芳

松茸や初手ちらす山の取　惟然

雨手跳手めきるる秋　古芳

おもしろく鳴すす雨音て　紫雄

すさ入人ふる次の居風名　菊

くこ八まるそさ一豆赤　芳

ウのさらみ森赤て帰　然

ゥけめ越林をとむする稍　菊

至て如しゆ春の法板　惟

麻まくふくて古風の家造　然

肉義むてまる法のくれ除　芳

ちるつもくく又も痛め改みみ　惟

ゝ雪八冷る法茅生の雪　菊

ゝ的ゝ雨ゝくれて一ゝ　芳

尺するゝれ魚義の内　然

ゝくゝはれ魚の内　菊

跳を引くゝ聖の上めゝ　惟

行よしの市ゝ立て手ゝ去谷川

昭止亭なの月を尺行ゝ

外ゝふて分ゝ秀ゝ月尺ゝ　菊

秋のゝしに魚荷走　之　睡止

京のうち祇園社の前を流れて
いりもの屋をよこうのむ中 脹
此てらに朱雀院の御
桜の枝をおれるしるし
清川につけ玉笹を引て尺
火のようなりし事のつたへ
笹とれハ桜のうんの消うせ
坂下てうち一里ばかり来る
思ひてそとよくてそ牛の養
村のむ尺女子集て病
嫁ようハ女くうし坊をなけ
大ようるれ秋の雲やけ

惟然
酒壺
支考
之道
青流
菊
止
然
壺
考
菊
流

汁の実を又ぶ新の月
すきの中へ蜂のよい毛
胸ふをてられ迷ものけ
打くくぬきの旅人
ぼうようの濱の系ぶをひろけ
きくし尺ようけてくよ系 蓮
めりきうと油の方物あうう
又ひの丈やう胡打えて
名号をとのうく尺をとて杉青
竹橋のくる山川の末
大根と胡桃をもて秋雲し
義稜意しうう角のさんやけき

芭蕉
正考
壺
然
菊
流
芭蕉
壺
考
菊
然

ゆるされて宿をハ問ふもむかしなる
半造 他てやの陰ふたる 止 生
幸らしふる計之ふ此と陰ふる 毛
此ゆ志めるゆ之と世間ふ笑ふ 流
惜の此ゆ之ふを て一羽 鶴 翁
ふりかきをひる 桂きけて 毛
船入を陰ふ仕ふ三井の 隆 流
枯さ勢を 深山ふ たく 秀
人しの風と 庵ふ ぬ 花 生
咀のさふを 結ふ ふ ふ 然

菊月廿一日 湖に車庸亭

秋の松を ふ ふ ふ る 嘆 の 角 翁
月 ふ ふ ふ ハ 義 宗 ふ 生 車庸
西の山 ニ ふ ふ ニ ふ 雪 峰 て 海生
走 ゆ る 牛 の ふ ふ ふ こ く も 緑力
男の為を ふ ん ま と 芽 ふ 去 性 光 調竹
小袖をむ し ふ 翁 し ふ 大 春 惟然
使 ふ 雪 や を ふ と ま ふ れ 支秀
か て と 醫 者 の 人 ふ れ ふ ふ 翁
桂 ハ を 恵 し の 桂 き し と 庸
寥 て お ふ 弁 当 の 梶 生
紀 ふ 足 谷 ふ ふ け て 芳 ふ ふ 力
す こ き ふ ふ く ハ 砂 ハ 大 ふ を ま ハ 秀

荻の末ぬ秋ハ宿借り百の穂　然
雨季の月のおてき川筋　庸
火ともしさゝ葉流を云つ詩り噂　翁
七種やとしハよろ流ほふ丈　力
尺さすみ蔦藤の芽葛やり千　堂
小屋形ふしふ金秋の春　然

所思

此道や行人なしに秋のくれ　翁
岨の畠の木にかゝる蔦　泥足
月しらむ蕎麦のこぼれに鳥の鳴て　支考
ちいさき家をかこしてらむ　游刀

了幸合羽打を入て荷揃る　諷竹
頓ていさみのとまる旅人を　車庸
ウ此寺ぬ蕎麦の噂しきりをかへり　洒堂
塀の霞山よ京を梅ちる　畦止
縫ゑときの霞さの仰す処る　惟然
姪子の降の跡をきさらぎ　亀柳
流ハものて肩する家ハ賎まき流　之道
かくさまぬ華よましる松風　翁
はるしと山田の鵜ハ立られて　舎羅
此茄の煙の秋ハさびしき　考
仕すまふ事ハ薄ろしる鵜の月　竹
塩焼の船のとくと入こむ　然

義もう帝の君引吹き立て　正
お側々彩お警蹇の尺るすさ　巻

園女寄　翁

きう帝の男さて尺る蹇と氏し　園女
もうちそ尺をもつす名月　諏竹
ひやしと朝の氏名をおうもけて　須川
なすそとき尺ようす尊八うれ巧　支考
ふふうとんふゆ者の弧八猪ひう　帳然
板を義て示しの加　洒堂
ゆうくうんう種子弧をため尺る　舎羅
絵ふさくうう歌の名代

頃ふうとうと盤の氏いふて　何中
夢猪のうちハふ在て火を挽　翁
猪ゆめと猪う嫁のさ尺すし　女
風うふてのむ子絵のすう初　竹
氏れしと月のむうる板の蹇　川
歌語ひけうる町名の秋　考
ゆうれうゆ宗う通る青義　然
ひうんのめくさられてかうう　堂
まさ八孫うもんう東京の茶　翁
氏代時の一ふうしふむ　中
二通ひ猪を横ふねハていうを　竹
志ようう和くすたくの氏橋　川

ほそしと色うつくしむ雲の臺　壺
実のくしけ小ゆりふる風　女
紫蔭の藩の才徳ましを　彦
清宿に寝のしむし　然
上の橋の前なる川の音　竹
植田の中を鶴の歩つく　翁
小かけに不断も押しあくび　女
終の仕むしのなやる筆　壺
有新ま常く織るの夜の長さ　竹
杖一本をその駄さし　中
千野の神のこれも神のぬかまれて　翁
老のちうしに娘ほしりる　川

餅ちきる綱のはよりの娘のさ　彦
戴ぬ鼻の鏡てかきな中　女
田の和の波遠なるさまおきる　壺
枌の木ゆく伸る　然
百家下枚の木戸ぎいらぬ竹　翁
第もを枚すかる山家　浪化
晴うら狭ひと鮮の餅くれて　去来
和ゆるはとうしの麦　如舟
田植と待つ松の起　翁

業経ちて秋のけやけさ　出翠
咲うけゆく袋の花の花　菊

いろいろに咲うえる戸口うれ　古芳
さらけ境子のひる蔦　紫雄
清き水の海のおもる秋立て　菊
うきれうつる破りのうく　芳
又ねてうきぬ家の蔦　紫雄
松風こもる山の中しん　菊

おしや白ぬさはる花の花　雪芝

松風に実れて寒し蔦の色　菊
秋ぬけ過ぎうけし蔦の紅　泡雪
雪うれて寒の星をさうて　紫雄
菊

年歴不知　主来

松松すうひけるるをこの　許六
雅おもしろくゆるたるの花　菊
ひとすきの松の下ふ根を　菊良
長い間おもしろ四五寸のうち　千郎
吹きれて結ハ鶴の角ちうく

桜ちりし枝ーくのほるさ川波　志

いかし鯛干潟を見ゆるなられけり　六

柳うち笠にみせ入いた風　菊

竹の葉に鶏のひかこえて　良

見えかくれ墜もほるらん　酔

何をかく紫吹風もかとれし　秋風

白の文の干生桜てけり　菊

三月ちる花見るを見て住める家

ころしとあるハ鳩か茶しし

すゝ鬼火ふしその法の文　菊

かれ果てらしきむ髪の火もしき

灰をつかみて手かけり　廷

亀山や嵐の山や比山や

雨上り酸うくえつる清

霞の夏かすみる山の月かな

芋かくしうつ小男鹿の角

呈露しられしく身なりけるま

笑ともしるる小倍るつゝふ

冬のきめるとの添きハ法く
世のうゝみいきとゝ位の等呼れ
うゝ意ゝみ法ゝくし呼れて
屋もりゝうゝみ翁の縁
屋の二重尖ゝてるもこう法
うねあるるのおゝ絲のすりもの
ひゝうもゝとゝ意の内
二町作て西ゝ祇のきゝ春し

核の風ゝ豆かゝ紙吹
ゝ意ゝ橋ゝ修おハひゝう柿おゝて
小信ゝゝハ一ゝこゝ
物解の結ゝ事品の風的
象意ハゝ織ゝ物ゝ家ひゝう
宮田ゝ蓑ゝ呼れゝて織
すきゝを切て運ゝ
等おふて廉物ゝ入簾の張

後おもしろく藤の藤さく
文科の里の姿をゆのすり
端をうられはきみ石竹
文ふうえうとしと牠ども
形ち走りのかひあくもあれ
孫ふかうく猫の表白
人しる中を突徒もられ合
四走のり魚打指も所

橋下を後の方走人っ表
石ふしを知ふ小船をより分て
蝶掃の毛々大さ毛もし
白山の人と中走ろ
徒つく人も しけ
多ふさふ小杉手毛の降ろう
板をこれより市のはさを
大和後へ入ろ花墨

孤――きの文ハかくる秋之
きのふ見ハ梅の垣ゆう

俳諧一葉集附合之部終